苦境経験 赤裸々に

上薗代表が初の著書

随筆かごしま

文芸雑誌「随筆かごしま」代表で鹿児島市の上薗登志子さん(74)の初の著書「ガハハおばさんの直感随想録」が、東京の燦葉出版社から発行された。

持ち掛けたのは今年1月に出会った同社の白井隆之さん(62)。「地方出版の灯を絶やしたくない」と地域にこだわり雑誌発行を続ける上薗さんに感銘を受けた。業界が不況にあえぐ中で、スタッフと2人で小さな出版社を営む自分の姿とも重なり、「一緒に本を出したい」との思いに駆られた。

初めての著書を手にする上薗登志子さん

随筆かごしまに掲載した巻頭言や、インタビュー記事など約10年間分を収録。雑誌を発行する中で何度も経験した苦境や、家族との出来事、ニュースを見聞きし思ったことなどを赤裸々につづる。

同誌は1978年に夫・義之さんが創刊。94年に他界してから上薗さんが引き継いだ。現在約4200部発行、10月で通巻176号を迎える。

「雑誌経営は大変だが、それ以上にたくさんの出合いをくれる私の宝物」と話す上薗さん。初の著書に「自分の本を出そうなんて考えたこともなかった。気恥ずかしい」とはにかむ。

「ガハハおばさんの直感随想録」はB6判240ページ、1575円。初版は2千部発行。

郷土の雑誌

◆さんぎし(8月号)　自由吟から吉元三智"げ死(し)ん事(こ)ちゃ算用(さんにょ)い無(ね)とかど吝嗇(けちばば)"(さんぎし社=鹿児島市唐湊2の11の19)

◆南船(8月号)　天降集から吉原三保子"千されている背開きの飛魚わたつみを翔びいし青さいまだ残して"(南船社=鹿児島市高麗町2の14)

◆華(76号)　短歌作品から藤井恭子"羅列する数字に人は縛られて一生めくりつづける暦"(華短歌会=鹿児島市西千石町11の11)